

家庭科の男女共修をすすめる会

会報'79夏

連絡先

東京都渋谷区代々木二二二二
婦選会館内 〒151

発行 一九七九年六月一〇日

'79年度総会開かれる

四月二日、婦選会館で'79年度総会が開かれました。新しい組織になって三回目の総会です。

'78年度は、支出が会費、カンパの額を越えてしまったため、財政が特に問題になりましたが、活動を小さくして支出を減らすよりも、収入を確保して効果的に運動をすすめるように「会費納入を確実に」「カンパも積極的に」

「会員ももっとふやさなければ」と話し合いました。

'78年度の運動のまとめと決算、'79年度の活動方針と予算は報告、提案通り承認されて、市川房枝さんの「少しづつは前進しているのだから辛抱強く続けて行こう」ということばで閉会となりました。

(報告・提案の内容は二・三ページ)

七月七日(土)午後一時半～四時半

於・婦選会館

(電話 〇三―三七〇―〇二三八)

1. お話Ⅱ子どもの人権と家庭科教育
日本子どもを守る会理事

山口勇子さん

2. アンケートからⅡ小学生の家庭科観

(16ページ参照)

国際児童年に因んで「こどものために」という観点から考えてみましょう。

参加費(資料代とも)

一般 三五〇円

会員 二五〇円

もくじ

'79年度総会開かれる	(1)
集会のお知らせ	(1)
'79年度総会報告	(2)
四・二一集会報告	(4)
集会の感想	(6)
パンフレットの出版・会計状況	(7)
できごと	(7)
教科書をよくするために	(8)
新都知事も共修賛成	(9)
都指導部長に質問	(10)
都知事にアンケート	(10)
大阪府婦人問題推進会議の提言	(10)
埼玉県計画試案	(11)
山口県の行動計画	(12)
福岡・高知の婦人問題に関する調査	(12)
別学共修を実践して(北海道)	(13)
鹿児島から	(14)
世話人会報告	(15)
世界のうごき	(16)
新世話人に中川さん	(16)
小学生へのアンケートについて	(16)
ご相談、ご意見をお寄せください	(16)



'79 年度

総会報告



'78 年度運動のまとめ

報告者 青山和世

1. 基本方針について

'78 年度総会で「共学」ということばを使うことを決めたが、その後「共修」「共学」はケースバイケースで使うことにした。

2. 具体的な活動について

- ①組織をひろげることと強めることのために
- ②世話人会 14 回開催 会報に記録を掲載。
- ③会報 178 夏、178 秋、178 冬、179 春号を発行。
- ④会員 178 年 4 月約 40 名、179 年 3 月約 40 名。
- ⑤名簿 178 年 12 月、会員全員に発送。
- ⑥世論に訴え理解を深めるために
- ⑦出版物の販売 1 教研集会、アジアの女たちの会をはじめ、他団体のいろいろな集いで。
- ⑧研究集会 4 回開催、会報に記録を掲載。
- ⑨新しいパンフレット「技術・家庭科の男女共学をどうすすめるか」を発行。
- ⑩他団体へのアピールと交流 1 教科書編集に

関連して出版労連と話し合う。

⑪教育専門家 100 名にアンケート。

⑫行政機関への働きかけ

⑬文部省・中教審へ

・高校学習指導要領に向けて要望。

・教科書検定に関して要望、教科書検定課長に面会

・中教審へ「女子特性教育」について考え直すよう質問、続いて要望。

⑭各自治体への働きかけ

・東京都教育庁指導部長に面会。

・東京都行動計画へ向けて要望。

・行動計画を発表した北海道へ要望。

・「岩手婦人対策の方向」に関連して要望。

・各府県と横浜、川崎、名古屋、京都、大阪、神戸、福岡、北九州、長崎の各市に要望。

⑮その他

⑯教科書会社に教科書編集に関して要望。

⑰イギリス機会平等委員会教育部長ヴァレリ・ヘイルさんと懇談。

⑱事務局体制

フルバイトの矢口幸子さんに事務処理の一部を依頼。

'79 年度活動方針

提案者 八島紀子

基本方針

全国の中学・高校で家庭科の男女共学を実現させることを目標とする。

具体的な活動

1. 組織の拡大、強化
- ①名簿ができたので、身近な人たちが連絡しあい、地域に核をつくる方向をめざす。
- ②会員の拡大は、アピール、パンフなどで行ない、今年度は、学生、生徒に積極的に入会をすすめる。
- ③世話人会の定期開催と記録を残す。
- ④会報の定期刊行（年 4 回）
- ⑤黄パンフ（一問一答）は保護者を中心に。
- ⑥集会の開催
- ⑦よその団体へのアピール、集会参加。
3. 教科書会社に対して
- ①新しくできた教科書のチェックをする。
- ②高校用の教科書編集に対して要望する。
4. 共学を具体的にすすめるために

①ピンクパンフを中学校の技術・家庭科の先生を中心にたくさんの人に読んでもらう。

②高校用の新しいパンフを作成する。来春発行予定。

③相談窓口開設。郵便で事務局へ。

5. 行政機関への働きかけ

①文部省、総理府等に必要に応じて働きかける。

②各地方自治体に必要に応じて働きかける。

6. 教育の中の男女差別をなくすための新立法について請願する

7. 財政基盤の確立

①会費を積極的に払ってもらおう。

②カンパは、ポリーナスカンパも含めて、積極的に集める。

8. 事務局体制の整備

《討論》

「会員をふやすために」ということで次のような意見が出されました。

- ・もっと家庭科教師に会員になってほしい。
- ・この会の魅力はいろいろな人がいること。教師ももっと入るべきだが、教師ばかりが前面に出ない方がよい。
- ・いろいろなところにパンフレットを持って

《予算・決算》

報告・提案 佐藤慶子

'78 年度決算

収 入 の 部		支 出 の 部	
'77年度からの繰越し	70134円	集 会 費	88600円
会 費	592000円	会場費	34100円
カンパ	79680円	案内	2500円
雑収入 (集会参加費など)	113191円	謝 礼	52000円
		会 報	319000円
		印刷費	175000円
		送 料	144000円
		事 務 所 代 代)	206620円
		アルバイト	
		会 員 名 簿	19000円
		アンケート調査 (送料とも)	27000円
		ピンクパンフリライト代	22000円
		雑 費 (郵便代等)	138025円
計	855005円	計	820245円
		繰 り 越 し	34760円

会費・カンパともに見込みより少く、前年度からの繰越しがなければ大きな赤字となるところ。

'79 年度予算

収 入 の 部		支 出 の 部	
'78年度から の繰越し	34760 円	集会費(4回として)	180000 円
		一回につき会場費	10000 円
会費 (2000円×400名として) 800000 円		謝礼(旅費を含む)	30000 円
		案 内 状	5000 円
		会報(4回として)	300000 円
		一回につき印刷費	45000 円
		送 料	30000 円
		事務所代(5000円×12ヶ月)	60000 円
		アルバイト代(15000円×12)	180000 円
		雑 費	114760 円
		計	834760 円

新たに印刷物をつくる必要が起ることも考えられるので、予備費はもっととりたいたいところだが、収支ともに内輪に見積った。

行くとかなり関心を持ってもらえる。

・どこにどんな集会有るか情報を交換し合い積極的に販売をしよう。

司会 半田たつ子
記録 梶谷典子

四・二一 研究集会報告

テーマ

技術・家庭科の「相互乗入れ」をどう実践するか

報告者

東京学芸大附属世田谷中 渡辺彩子さん
昭島市清泉中 武市成子さん
昭島市昭和中 奥原京子さん
川崎市多摩区立中野島中 中沢美智代さん

総会に先立ち、ピンクパンフの作成に協力してくださった先生、地域ぐるみの実践をしていらっしゃる昭島の先生をお招きして研究集会を開きました。

出版労連との話し合い（8ページ参照）、埼玉、山口の行動計画について（11、12ページ参照）など、馬場洋子さんの経過報告に続いて報告を聞き、話し合いました。

渡辺さんのお話

私たちの学校では共修をはじめて7年目です。昭和46年から52年まで、週三時間のうち

一時間を共学にしてきました。昭和53年から新指導要領に合わせて週時間数が2、2、3と減ったので共修の体制も変えました。一年は一学期、二年は三学期を共学にし、三年はこれまで通り隔週に二時間ずつ、年間を通してやるようにしました。

はじめに申しましたように46年から部分共修の実績もあり、今度は時間数が減ったのだから思い切って全面共修の話もありましたが、道具などの準備が間に合わないということもあり、またなかには男女特性論も出たりして、部分的別学を残しておこうという技術の先生からの申し入れがあったので、このような形にしました。それに技術の先生が講師なので他の学校と違うことをすると負担がかかるということもありました。人間関係でははじめてからきめつけてしまうと、後発展しなくなるので……部分的にやりながら実をとるという方法でやっています。

テーマは一年は住居。技術科は製図・建築を、家庭科では住居の環境、両面からやるようにしました。二年生は電気・屋内配線と家庭電気、三年は保育と被服が共学です、三年

目で共学がやっと軌道にのったというところ

です。やってみての成果ですが、内容的には女子だけでやっていたときと変らないのですが、何というか、共学をやっているということが自身に返ってくる。たとえば生徒の授業態度が違うのです。共学では反応がすぐで、つまらなければ騒ぐし、興味や疑問があればすぐ言動になります。自分にとっては大へんだけれど手応えがあります。これは女子生徒にとっても同じでしょう。三年生の保育家族の話では家庭生活の話しあいをしているとどうしても男と女の違いに話がすすんでいきます。男子生徒の存在を意識して内容が違ってくるね。

……というわけで、私たちの学校では教科の中で共学が認められて、うれしいのですが、逆に摩擦がないので、学校の中の他の先生に知られない。暗黙の了解の上で既成事実を積み重ねているような感じが、学芸大の四つの付属中学の中でカリキュラムの中にきちんといれているのは世田谷中学だけでしょう。また地域との連帯がないので現在やっている先生が転動になったら消滅してしまうおそれがあります。

今後の課題は、できるなら全面共学にした

二年は 被服・食物・住居（家庭）

木工・金工・機械（技術）

三年 保育・食物・被服（家庭）

機械・電気（技術）

生徒の受けとり……問題になるようなことはありません。怠けている向きにはレポートでしめ上げています。とにかく男女一緒にやることはたのしい、授業がビシッとしまってきました。一歩踏みだすまでは教師の決断が大きな役割を果たしましたが、その後は子ども側のからハッパをかけてやってきました。とてもたのしそうだし意欲的なのです。

たとえば保育の授業で家族の不満を出しあうのです。「台所へ入ると母がおこる」「掃除すると母がおこる」などと子どもの訴えが出されると、他の子が「何て、ワカラズ屋の親なのだろう、僕が行って説得してやる」といった話しあいになったり、女生徒は「お母さんの仕事は兄はしないで全部、妹のわたしの上に廻ってくるのだ」と怒ったり……。

地域の受け入れは割とすんなり入っていました。組合の支援もありましたし、父母会の話でも賛成的でした。しかし、私や技術の先生がまた転任になってしまったら困るので、地域の中に根づかせておくように、市教研の研究テーマも共学問題とし、四年間続けてき

ました。一校だけでやっていると風当たりが強い、少しでも多い方が共学をすすめる上で力になるでしょう。全面共修にしての別の利点は生徒の忘れ物が少なくなったこと、教師の側も授業が単純形になって教材研究に集中しやすくなったということです。

奥原さん、薄井さんのお話

昭島市が地域ぐるみの共修をはじめてから四年目になるわけです。私たち二人とも小学校の家庭科専科だったので51年に中学へ転任したのです。それで小学校で共学であったものが中学で別学になるのはおかしいなという発想がまずありました。それに学級づくりの面からも、わざわざこわしてやるより共学のままやったらいけないかということになりました。でも最初の年は準備不足で無我夢中の状態で、共通領域の電気からはじめたのですが、テストの使い方でおしまいになってしまいました。

次の年は技術の先生と力を合わせ全面共学を打ち出したかったが、技術科の先生の一人が女子を入れるとレベルダウンになるのではないかと云われ自信をなくし、一年生は三学期だけ、二年生は木材加工と電気を共学にし

いのですが、技術の方をどうするか、無理に家庭科の方へ引き込もうとするのではなく、技術の先生でも、生産技術という捉え方でなく一般の生活の中の技術と捉えておられる人もでてきているので、将来家庭科との統合も考えられるのではないかと考えています。なお56年度までには全面共学をめざしています。

武市さんのお話

52年4月から一年生三時間（一年間）、三年生三時間（一学期）男女共学の家庭科と技術科の授業をやりました。

私は昭島中に転動して五年目になるのですが、その時、昭島中に技術の新卒の方が来られ、共修をやろうと声をかけたら、彼もやろうやろうということになったのです。しかし慎重を期して二年の研究期間をおき、52年に二人が一年の配属になったときから全面共学ではじめました。現在は二年、三年は全面共学、一年生は一学期だけ共学です。先生は技術科が男子二名、家庭科は女子二名です、先生方の反応は技術科の一人が反対、そのあと新卒の技術の方が来たが彼も反対なのです。

授業内容は、一年は家庭科が食物・被服、技術科が製図・木工の二本建て、時間数も半分に隔週で三時間ずつやっています。

ました。

今年は技術の先生も一人ふえ余裕もできたので、一時間、製図・電気を共学にし、残りの二時間は前期は家庭科の食物、後期は技術科の木工、二年生は一時間だけ共学で栽培をやリ、三年生は講師の先生なので全面別学の態勢をとっています。

司会 家庭科の共学では食物はうまくいくのだけれど、問題は被服だという声もあります。どうでしょうか。

武市 やり方によっては食物以上におもしろいのではないですか。被服の理論、布の性質、織物の実験など自分の着ているものと同じ合わせながらやっています。実習では男の子はランニングパンツ、女の子はショートパンツを作ります。ここで一ばん早くできるのも男の子、よるこんでやるのも男の子、できる人できない人の差も大きいのです。女の子は将来やらねばならないから、いやいやながらやってくる子が殆んどです。みんな手がとても動かなくて、パンツにゴムひもを通すのに一時間もかかってしまうんです。

中沢さんのお話

私たちの学校は校長先生が前向きで、昨年

は新指導要領にむけて移行期間をどう取り組むか急いで計画をたてることになりました。私は三年を担任していたので、保育の共学をやってみたかったのですが、保育と栽培を隔週にして共学でやりました。今年度ははりきって全面共修で食物と木材加工を考えていたのですが、指導主事から移行期はつつしんで欲しいというお達しがあり、先生方がビビってしまった、校長先生はすすめるように云われたのですが……なには指導主事にお詫びにいく人もでてきて今年ではできませんでした。

会場全体での話し合い

共学にすることの大へんさは、先生が女子だけ教えていた時の倍の回数だけ授業をこなさなくてはならないこと、中野島中学の中沢さんは同じ授業を12回もくり返されたとか、共学で家庭科を教えるには、それなりに笑わせる所やみせ場も工夫しなければならぬ。他の人にはわからない苦労が多いという報告もあり、そんなに努力しても生徒の方は一週一時間では印象も薄く、神経がすりへる割には成果が少ないという嘆きや、共学をすすめていく上でのアイロは先生方の人間関係に、殊に講師の先生だったらむずかしいこと、結局、共学をすすめていく条件は、教師の構成

と教室がいくつあるかに規定されることなどが話されました。けれどもみなさんの体験談をきけばきくほど、やっぱり共学でなければならぬし、「共学については何一つ心配することはない、教師が思い切って踏み出すかどうかにかかっている」という発言で閉会となりました。

司会 和田典子
記録 嶋田道子

この集会について、中川和さんは次のような感想を寄せてくださいました。

参加者がいつもよりすくなく思えたのは残念でしたが、忙しい学年はじめなのに五人の方が来てくださったって、実践報告をしてくださったのは感激でした。まだまだ実践校は全体から見ればすくないかもしれませんが、全国のおちらこちらでがんばっている人たちがいることに勇気づけられて、私もささやかながら将来をにう子どもたちのために努力してゆきたいと思いました。
ピンクパンフもおおいに活用したいと思っています。
どうもありがとうございました。

パンフレットの出版。

会計状況

すすめる会で編集発行しているパンフレットは、運動の趣旨を解説し、また男女共修の教材研究の資料を提供するものとして好評を博している。その発行と会計の状況を示すと「家庭科の男女共修をすすめる一問一答」(黄パンフ)は、昭和四十九年八月の初版が五刷を重ね八千部、五十三年三月の改訂版二千部を含め発行部数一万部(印刷代三十九万二千六百六十円)、「男女共修の家庭科で何を教えるか」(赤パンフ)は昭和五十年七月の初版二千部以来五十三年一月までに四千五百部を発行(印刷代四十四万四千九百四十円)した。なお、黄パンフの売上げ回収分を基に、最新パンフレット「中学校技術・家庭科の男女共学をどうすすめるか」(ピンクパンフ)二千部(印刷代二十八万四千九百三十五円)を発行した。赤パンフの売上益金三十五万五千円で来春、高校の共学のためのパンフレットを発行する予定である。

(佐藤慶子)

できごと

◇奥田さんの後任に宮野さん

新しい文部省初等中等教育局審議官は宮野礼一さん。石川県出身で香川県教委に勤めたこともあり、人事、会計、教科書、体育などいろいろな部門を経験された「行政家」だそうです。昭和六年生まれのお若い方ですが、さてお考えはどれだけ新しいか……。

◇家庭基盤充実研究グループがスタート

大平首相の掲げるスローガンに従って、首相の私的ブレーンのひとつとして「家庭基盤充実研究グループ」がスタート、学者や中堅官僚二十三名(うち女性六名)をメンバーとして、夏頃までに結論を出すべく話し合いをすすめるそうです。「女は家庭」的な考え方が出て来ませんように……。

◇世界人権規約ようやく批准

一九六六年の国連総会で採択された「世界人権規約」を、ようやく日本でも批准する運びとなりました。

この規約は、人権を守るために各国で何をなすべきかを定め、規約で規定される権利が

差別なく行使されなければならないことをうたっています。特に男女に同等の権利が確保されなければならないと強調しています。こうした規約ができてから十年以上も批准されないままになっていたので、日本政府は人権や平等の問題に対して全く消極的だと言わなければなりません。

教育の項目では、平和教育と無償化の問題について特に強調していますが、もちろん機会均等の考え方ははっきり出ています。

批准を機会にこの規約もひとつのテコになれば……。

◇各自治体の行動計画(10/12ページ参照)

前号では北海道、岩手県、東京都のほかは行動計画はできていないとお知らせしましたが、山口県の計画は二月一日に発表されました。お許しください。

埼玉県では三月末に県計画試案を発表、これから県民の声を聞いた上で行動計画を確定するという事です。大阪も婦人問題推進会議の提言を発表しましたが、行動計画との関連については書かれていません。(編集部)

教科書をよくするために

出版労連も前向きに取組み

昨年、教科書の問題について出版労連の人たちと話し合ったあと「また話し合います」と約束しましたが、三月一四日に下打合わせをしたあと、四月一日に第二回の話し合いを行いました。

「出版労連としては、教科書の内容検討は行っていない」「教科書は常に現場の後追いである」など、消極的とみられる発言もありましたが、四月二四日付の「教対通信4615」(出版労連出版対策部教科書対策委員会発行)では基本的に同じ立場であることが述べられています。その文章をご紹介します。

4・11家庭科の男女共修をすすめる会と家庭科教科書についてこんだん会を行なった。

出席者 教対委 村本、浅羽

一橋労組・実教労組家庭科編集者
すすめる会側

和田典子 半田たつ子他

家庭科科目の性格および現行版教科書についてこんだんを行なった。

「すすめる会」側より、現行家庭科の科目の性格および、現行家庭科教科書が、男女差別を助長する働きをもっており、指導要領の改定に伴い、教科書編集上留意するように労働組合として経営・職場によびかけてもらいたい旨の要請があった。このため、次の教対事務局長見解を明らかにし、検討課題とした。

。現行の家庭科教科書が「男女差別を助長する内容を多く含んでいる」という批判に対する教対事務局長見解

一、教科書検定で、性別による役割分担論(男ないし夫は仕事、女ないし妻は家事)の押しつけの指示がなされれば、これに反対する。

一、家庭に関する学習を、女子のみ必修とすることは、男女平等の観点より問題がある。
一、新学習指導要領では、とくに「家庭一般」は女子必修と定めている。この定めは性別による役割分担論を教科書編集に押しつける危険性があるので、指導要領の抜本的改

革を要求する。

一、教科書経営および職場が、編集主体の確立をはかり、文部行政の意図に加担しないようよびかける。

一、国民の期待に応えうる新しい家庭観が教科書に生かされるような教科書発行・採択の条件・状況がづくりだされることを切望し、われわれも取り組みを強めたい。

会社側へも働きかけ

出版労連と話し合いながら、会社側への働きかけの必要性を強く感じました。要望書を送ったことについては前にもおしらせしましたが、夏休み頃各社を訪問する計画を立てています。参加ご希望の方、教科書についてご意見をお持ちの方は事務局までおしらせください。

教科書協会にも要望

教科書発行者の団体である教科書協会に対しても、前に教科書協会に送った要望書のコピーを同封した手紙を三月一六日に発送、この問題についての配慮を要望しました。

(梶谷典子)

自治体のうき

新都知事も共修に賛成

新しい東京都知事は保守の鈴木俊一さんになりましたが、鈴木さんも家庭科の男女共修には賛成だとおっしゃいますので、東京都で積極的に共修がすすめられるよう、働きかけを続けたいと思います。

アンケートの回答では

前号でもちょっとおしらせしましたように鈴木俊一、太田薫、麻生良方の三氏に共修の問題についてはがきで質問をしましたが、その質問と回答は次の通りです。

質問一、あなたは、中学・高校における家庭科の男女共修に賛成ですか。

三氏とも「賛成」。

質問二、当選された場合は、家庭科の男女共修のために大いに力を注ぐ意志がおりで

すか。

麻生、太田両氏は「ある」。

鈴木氏は「その他」に○をつけた上「教育委員会の仕事ですので側面から努力します」と回答。

質問三、当選された場合は、行政を通じて、

「男は仕事、女は家庭」という社会通念を変えて行く意志がおりですか。

三氏とも「ある」と回答。

文部省の皆さんはこの結果をどうお考えになるでしょうか。

集会では

「都知事候補にきく」集会(国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会主催)でも、家庭科の男女共修が話題になりました。三回にわたって、鈴木氏、太田氏、麻生氏一人ずつと女たちとの話し合いが行われましたが、ここでも三氏とも共修に賛成の意志表示をされました。

◇

鈴木さんは「男でも女でも、家庭にはどんな作業があるかを知り、処理のしかたを身につける必要がある」としながらも、はじめは「家庭科のような問題の多い教科は、必修でなく、選択でよいのではないか」と発言。会場から「必修にすべきだ」という意見が次々に出されると、「こうして話しているとだんだんそうしなければいけないと思うようになりました」と柔軟(?)なところをみせた上「東京都行動計画は後退させない」と約束。「東京都行動計画は具体性が足りない。もっと積極的にすすめてほしい」という要望に対して、「今はそう思っています」という回答でした。

◇

太田薫さんは、まず「男の子でも家庭的な子もいる、家庭科をやらなくたって、誰でも一応のことはできるように、封建的な家庭をつくるための主婦教育としての家庭科はやめてしまった方がいい」と述べ、反論が出ると「内容を変えるなら男女でやってよい」という結論になりました。

◇

これに対して麻生良方さんは、「当然共修にすべきだ」と一番積極的な表現でした。

都指導部長に質問

東京都行動計画には家庭科の男女共修が盛り込まれましたが、共修実現のために更に具体的な計画をたてるよう要望を出したことは前にお知らせ通りです。

四月二日、都教育庁指導部長あてにまた次のような手紙を出しました。

新しい年度を迎えましたが、都行動計画に従って家庭科共修についての検討をどのようにすすめていらっしゃいますでしょうか。お目にかかってお話を伺いたいと存じますが、おいそがしいことと思いますので今回は文書でおたずねいたします。

次の点につきまして、なるべく早くご回答くださいますようお願い申し上げます。

1. 中学校技術・家庭、高等学校家庭科男女共修についての学習内容・方法の検討はどんな機関で行われ、どんな方々が参加していらっしゃるでしょうか。または、どんな機関参加者を予定していらっしゃいますか。
2. 検討のスケジュールはどう決っていますか。いつ頃までに結論をお出しになるおつもりですか。今年度はどの位すすめられる

- 予定ですか。
3. 高等学校家庭科男女共修についての実験研究のスケジュールはどうなっていますか。
 4. 1、2、3が未定の場合、その理由をお知らせください。

これに対して五月一六日付で回答が来ましたが、都行動計画に従って積極的に共修をすすめるという姿勢はみられず、新しい指導要領によって「相互乗入れ」をすすめたり、「男子が選択履修する場合」について検討するというだけのものでした。世話人会では今改めて申入れすることを考えています。

各府県新知事にアンケート

四月八日の統一地方選挙と、去年の選挙で初当選した新知事にもアンケートを出しました。(青森、岩手、秋田、山梨、大分、佐賀の七府県です。)

性別役割分担意識をなくし、男女平等教育と家庭科の男女共修を積極的にすすめるつもりがあるかどうかを訊きましたが、結果は次号でお知らせします。

大阪府婦人問題推進会議の提言

民間有識者による大阪府婦人問題推進会議は、三月一三日に「女性の地位向上に関する提言」を発表しました。

固定的な男女の役割分担解消をめざしたかなり具体的な項目にわたる提言です。学校教育によって男女平等をすすめるべきだということもはっきり示され、家庭科については次のように書かれています。

「中学校の『技術・家庭』および高等学校『家庭一般』の女子のみ必修を改め、男女役割分担にとらわれないで、将来を見通して男女共修をすすめるとともに、男女を問わず、自活できるための基本的知識と生活技術・さらに消費者としての社会とのかかわりなど、教科の内容を充実しなければならない」

このほか、教科書や副読本の中の女性像の検討、婦人問題を教課の中、特に社会科家庭科でとり上げるべきこと、教員に対して婦人問題の学習の機会をつくる必要があること、体育、職業教育、自治活動への平等な参加について述べられています。

(梶谷典子)

婦人の地位向上に関する

埼玉県計画試案より

去る三月埼玉県婦人問題協議会より、埼玉県知事に対して、「婦人の地位向上に関する埼玉県計画試案」の答申がなされた。協議会のメンバーは大友よふ会長以下三二名であるが、共修の会の広田寿子氏も労働・職業部会の部会長である。

埼玉県民の婦人問題に関する意識調査では女性の五割が「夫は外で働き、妻は家庭を守る」という伝統的な役割分担を支持し、男性の六割がそれを支持している。五月一七日にこの試案に対する県民の意見交換が行なわれた上で、正式に県の行動計画として推進されていく。

学校教育の現状と課題のところでは次のような指摘があり、県の教育の根本をゆるがす提起がされている。「既存の公立高校(全日制)普通科をみると男子の高等学校六校、女子の高校十二校が男女別学制をとっている。……男女平等を基本とする教育を進めるために公立高校においては男女共学制を更に推進することが必要である。」すでに県教委は今年から男子高への女教師の配属をやっており

要望

本年三月、貴県婦人問題協議会が出された「婦人の地位向上に関する埼玉県計画試案」(答申)では、学校教育(1)機会均等(2)教育内容・方法の改善と充実の項で公立高校の男女共学と男女平等教育、ならびに家庭科の男女共修を推進していく方向を打ち出されました。「男女の役割分担意識にとらわれない教育の推進」をわが国の国内行動計画も強調しております以上当然のこととはいえ、このような具体的な内容をはっきりと打ち出された婦人問題協議会の答申は私たちにとって心強い限りでございます。

この計画は、県民の意見を汲み上げて、更に充実した内容とし、県市町村行政当局が実施に当たると伺っておりますが、この答申の具体的考え方、計画の内容がゆがめられることなく更に前向きに検討されることを期待しております。

これから策定される計画では、「施策の方向」だけでなく、行政のどの部局でいつまでに、どのような具体策で行うか、という現実的な方法の手順をあきらかにしていただくよう要望いたします。

(中嶋里美)

山口県の行動計画

山口県婦人行動計画が二月に策定されました。「国際婦人年の目標達成のための世界行動計画、国内行動計画に準拠し」と明記しながら、その内容は「世界行動計画」の精神からはほど遠く、逆行さえ感じさせるものです。

◎「基本的な考え方」では「……固定的な男女の役割分担意識が社会通念として今なお強く残っており、このことが婦人自身の意識や行動を消極的なものにしていく」と明記しながら「男女平等を基本とする条件整備」では「婦人が、その主体的選択によって女性のもつ特性を生かしながら、機会と責任の平等を実現するために……」とし、「家庭における条件整備」では「婦人は家事労働をはじめとして、健全な家庭生活の維持に大きく寄与している。今後いっそうの責任の重要性が認識されつつあるが……婦人の地位向上のためにも、家事労働の正当な評価の実現をはかることが必要」又、「婦人の社会参加の促進」のための「社会的気運の醸成」では「家庭内における理解と役割分担」で「まず婦人の社

会参加に対する理解を深め、適正な役割分担を促進する」と明記されています。

これらは男女平等の達成のために、家庭・社会の中で伝統的な男女の役割分担を変える必要性を主張する「世界行動計画」の精神に逆行するものです。

◎「教育訓練の充実」の「新しい時代に即応する学校教育」では「男女平等の思想を身につけるよう配慮するとともに、母性に対する自覚と責任が果されるよう教育課程の編成にあたっては研究する必要がある」とし、家庭科教育のあり方の検討、学習活動の充実、ホームプロジェクト、家庭クラブ活動の推進をあげ、主要事業として、家庭クラブ全国大会への派遣、県家庭クラブ研究発表大会開催、指導者養成講座をあげているだけです。

これらは従来から行われている事業であり、「学校教育の中で男女平等教育の推進」のための施策を何ら明記しないで、母性教育をうたうことは「世界行動計画」に逆行するものです。あまりにおそまつな行動計画にあらんとしますが、ぜひ家庭科教育のあり方の検討の中で、中学校の「技術・家庭科」、高校の「家庭一般」の男女共学を早期実現していただきたい。意見書を出そうと、今検討中です。

(馬場洋子)

福岡・高知の婦人問題に関する調査

福岡県では、婦人行政推進のために昨年末かなり大がかりな調査を実施、三月三十一日に報告書が出されました。

対象は二〇才以上の男女ですが、性別役割分担意識についてみると五一年の全国調査よりも保守的で、「男は仕事、女は家庭」に同感する人とやや同感する人を合わせると、女七六・九％ 男八六・一％ 計八一・一％。同感しない人とやや同感しない人を合わせて女二三・一％ 男一一・二％ 計一八・八％。

「女性も社会と結びついた活動をした方がいい」という考え方の人、「子どもをしつけは、男女同じようにすべきだ」という考え方は、男女同数ですが、炊事や掃除、洗たくについては九〇・四％の人が「妻が中心となって受けもつべきだ」と回答しています。

高知県では、働く婦人についての実態調査の結果を三月に発表しています。

家事の分担状況をみると、働いていても自分が中心になって家事をする人が七六・八％で、役割分担の伝統の強さが示されています。

(梶谷典子)

各地からのたより

「別学共修」を实践して

北海道大学教育学部附属函館中学校
森 真知子

新しいノートと教科書をきちんと揃え、緊張して座っている。今日は新入生最初の家庭科の時間である。

「この子たちと新たな歩みが今日から始まるのだ」と私もいつもと違う緊張を感じる。始めての時間はオリエンテーションを行なう。家庭科は何故学ぶのか。この問いに今年の子供たちはどのように答えるだろうか。

「今は親がいろいろ面倒を見てくれるけれど、将来、親から離れてひとりであるいろいろなことをしなければならなかった時、困らないために——」とまずは第一声。「つけたします。将来だけでなく、今だって生活しているのだから今の生活もきちんとできなければこまると思います」と第二声。続いてそれぞれの思いを語り出す。しかし、この組からは、女だから、ということばは出てこない。

二・三日前に座席の隣の男子に自分の「女子向き」の教科書を貸し、男子も家庭科をやることをすでに知っているからだろうか。

一昨年末では、家庭科を学ぶ意義についての子供の第一声は「将来お嫁さんになっても困らないため」が上っていたものだ。続いて「女らしくなるため」「主婦になって一家を切り盛りするため」であり、家庭科教育は子供たちの意志によって主婦準備教育のレベルに乗せられたかのように見え、こうした主張は多くの者の同意を得るものであった。

男・女の枠をはずし、生活の主体者として学ぶ必要のある教科であることを納得させるにはあまりにも現実には矛盾している。「男子向き」「女子向き」の教科書を手にし、男女それぞれにグループ分けされて異なる授業を受けなければならぬ彼女たちに発想の起点は生活の主体者であることなのだと考えさせるには無理があったのである。だからこそ、生活者とは、とりもなおさず「現在と将来に生きる生徒自身であることなのだ」と自覚に目ざめさせるためのゆさぶりによっても子供たちの意識は大きく変わるものではなかったの

である。

しかし、男女共修（別学共修ではあるが）を始めてからは違う。

女子特性論の発想も、「男女分かれて学習するけれど、学ぶことは同じよ」「女子向き男子向きの教科書を隣と交換して使ってね」という私の一言で方向転換を示す。子供たちの発想は怖い程柔軟でさえある。

子供たちの発想が柔軟であるが故に、教師である私たちが子供たちに示す事実が子供たちの可能性を制約する要因にならぬよう努力しなければならぬ。

しかし、「女子向き」と書かれた教科書、「別学共修」、学年がすすむにつれて家庭系列が多くなる事実を子供たちに示さなければならぬ現実には生きながら、「生活の主体者の自覚に立って学べ」と訴えることに苦痛を感じずにはおられない。

「男の人も生活のことが自分できちんとできればみんなで協力しあって仲よく暮らせる」といったT君。「生活のことをみんなで勉強し、できるようにすると後の人によい手本を残せる」といったY君。この子供たちによってこれからの社会は変えられつつある。

(昭和五十四年四月二十五日記)

鹿児島から――

横山雅子

こんにちは。

私は、鹿児島島の海辺の町で高校の非常勤講師をしています。(三年選択「保育」担当)家庭科と直接かわりをもつて三年目になりますが、子を生み育てること、を、女・子どもの側からとらえなおそう、という視点から、「保育」の学習の初めに「女のからだ―性を考える」を新たに編成し、展開しました(従来の「妊娠・出産―母性保健」の章・詳しくは月刊「家庭科教育」78・11月号、79・2月号)。

この実践は私にさまざまなことを考えさせてくれるものでしたが、特筆したいのは生徒たちの反応です――卒業したら阪神・京浜に働きに行く者も多い、見えぬところで世の中を支えていくであろう、男尊女卑の悪名高き地方の小さな町の高校生たち――。「女のからだ」を始めたばかりのころは恥ずかしさや戸惑いも見られましたが、すぐにも、ある張りつめた真剣な時を生徒ともどももてるようになりました。そして彼らは、まとめと

して次のようなことをそれぞれ自分のことばで表現しました。いやらしいと思っていた性を、しっかりと正しく学ぶにつれそう思わなくなった、男子にもぜひ教えてほしい。そうすることがまじめに性を分かち合うことにつながる、等々……。

「女のからだ」の学習を通じ、子を生み育てることの出发点である性を考えることから当然パートナーである男子へも、となろうとは思っていましたが、生徒の口からつぶさに、男子へも、の切実な声を聞くと、家庭科のこれからの方向として男女共に学ぶ、それもすべての生徒が(選択でなく)学ぶ、ということとは必至なことだと思えます。そこを家庭科教師は自らにしっかり課さなければ、と思うのです。

しかし、鹿児島島の男女共修へのとりくみは未だ……の感が強いようです。先だって熊本市で開かれた家庭科教育研究者連盟九州地区サークル連絡協議会の第八回研究集会に熱心なお誘いを受け、参加してきました。九州の各地から多くの方が集い、いきいきと活発な交換が行われましたが、鹿児島からは私一人の参加でした。熊本や福岡・大分からの参加者がいく人もあったことにくらべ、さびしい限りでしたが、その折、熊本

集会の実行委員長である中山ソミ氏から、次期集会の会場県を鹿児島にひきうけてもらえないか、そのための打診をしてくれないか、旨の依頼を受けました。これまで一度も集会の会場県を担当したことのない鹿児島に、そのことによって新たな動きをひき起こせないか、というねらいもあるとか。

今、鹿児島の家教連メンバーをお知らせいただいて、ともかくも自分たちの自主的な集まりをもつことが先決ではないか、という動きにとりかかったところです。聞けば県の家庭部会が新旧二手に分かれケンケンガクガクの様子、不平・不満のタネはつきぬとか。しかし、それを不平や不満に終らせることなく、整理し、新たなものを作っていくことをしなければならぬでしょう。そのためには一人一人が力量をつけていくこと、一人では解決できぬ問題や悩みをもちより、のりこえていくための集まりが必要でしょう。さらには、女教師が何か言うと、ゴッパバ(「歯ごたえのある女」の悪称)・呼ばわりする教師集団職場全体への働きかけも欠かせません。

ずいぶん道は遠いけれど、手のとどくところから働きかけねば……というところです。編集部ではおたよりをお待ちしています

世話人会報告

『三月三十一日』

◇次回集会(六・七月頃)のテーマについて検討しました。(1ページ参照)

◇次次回集会是「新教育課程における家庭一般(和田)」「共修を支援する会」からの報告」の予定です。

◇総会について

78年度総括、79年度活動案が、青山、八島から提出され、検討しましたが次回世話人会で再検討することになりました。

79年度活動案では特に、黄バンフなどを父母の共修理解のために利用してもらおう、各地に核を作り、自治体に働きかけよう、という意見が出されました。

◇自治体への働きかけ

東京都に対し、新年度すぐに行動計画についてのスケジュールに関し質問状を郵送することに決めました。

『四月一四日』

(馬場洋子)

二二日の例会、総会を前に、世話人の役割分担、当日の進行の打合わせなどを中心にして合った。(例会、総会の記事参照)

特に問題になったのは、総会の運動方針案に、以下のことを追加して盛りこむ、ということだった。

①地方選挙が終った段階で新知事(十人あまり)に教育、特に家庭科共修について質問状を出す(市長、区長にも、という声もあったが範囲が広すぎるので知事のみとする)ことになった)

②夏、高校指導書が出るので、高校「家庭一般」を出している教科書会社と話し合いをもち、新教科書に反映させる。

③高校共修用の新バンフを年度内に出す。

(駒野陽子)

『四月二一日』

本年度第一回目の集会と総会のあと、市川先生をかこんで二、三の点を話し合った。その第一は、国連差別撤廃条約に対する日本政府の態度への疑問。第二に、ユネスコ第二十回総会概要報告書中の原文「ガール」「ボーイ」を女児、男児と限定したのは文部省の意訳ではないか。第三に、高校教科書にみる男女の役割分担についてどのように抗議するか。第四に中学校技術・家庭科の移行措置段階における相互乗入自粛の文部省、指導主事発言の問題。第五に、教育における男女差別禁止法案作成の請願について、であった。このう

ち、一、二、四については、市川先生が五月中に外務省、あるいは文部省の関係者をよんで会のメンバーとともに事情をただして下さることを決定。

(佐藤慶子)

『五月九日』

一、集会は七月七日(土)午後一時半からテーマ、講師を決定。

二、小学生へのアンケートは、市街地、農村、住宅地を全国から選び、小学校六年生の声を聞く。

三、埼玉県知事及び婦人問題協議会に対して埼玉県の婦人の地位向上に関する埼玉県試案を評価し、共修実現のため要望書を送る。

四、山口県の婦人行動計画に対して内容があまりにも不十分なので、次回世話人会でよく話し合い、意見書を送る。

五、文部省への働きかけは、市川さんをお願いし、五月中に高校用教科書、「技術・家庭」の相互乗入れの指導、ユネスコ総会の翻訳の件などについて申し入れをする。

六、地域ごとの運動をすすめるために世話人へアンケートを送る。

七、会員の声は、秋ごろアンケートで聞く。八、八月のP・T・A大会(福井)に参加。

(八島紀子)

△ 世界 の う こと き ▽

◇「差別撤廃条約」ができます

国連では今「差別撤廃条約」の審議がすすめられています。一九六七年「婦人に対する差別撤廃宣言」が採択されましたが、同様の趣旨で更に一歩すすめて条約を制定しようという事です。

条約案の中には「男女の役割に関する定型的な差別観念を撤廃するための措置及び家族に関する教育」「教育における男女平等の確保のための措置」の項目がありますが、「宣言」と同様、「男女同一のキャリアム」ということが入ることが期待されます。文部省はこれに抵抗しているといわれますが……。

◇ ユネスコでは

昨年の一〇、一一月、パリで行われた第二〇回ユネスコ総会の第五委員会では、婦人の地位に関する問題が扱われましたが、フランスから出された次のような内容を含む決議も採択されました。

「家事と育児の準備としての家庭科の学習指導が、男児に対しても女児に対しても、同様に行われるようにすること」(文部省の訳)

原文は 家庭科＝domestic science

男児、女児＝boys, girls

男子、女子とせず、男児、女児としたのは、男の子には小学校でだけやらせたいからなのでしょうか？

◇ 世界の青年の性別役割分担意識

やや旧聞になりますが、総理府で'77年11月から'78年1月にかけて世界の18才から24才までの青年を対象として意識調査を行ったところ、日本の青年は性別役割分担意識が強いということがわかりました。

「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」という考え方に賛成か反対かといった結果は左の通りです。

	賛成 (%)	反対 (%)
日本	50.4	31.7
アメリカ	27.3	71.4
イギリス	24.4	67.0
ドイツ	28.8	58.7
フランス	29.3	63.9
スイス	29.7	65.1
スウェーデン	8.2	85.5
オーストラリア	27.4	63.9
インド	52.6	45.6
フィリピン	68.1	30.9
ブラジル	28.3	70.5

大体各国とも、男性、高等教育を受けていない人、ブルーカラーの人に賛成が多いそうです。

※ 新世話人に中川さん

総会で会員をふやそうと話合ったあと、世話人をふやすことも話題になりましたが、総会が終ってから中川和さんが世話人になってもよいと申し出てくださいました。中川さんは中学校の家庭科の先生です。

※ 小学生へのアンケート

夏休みには国際児童年の行事がいろいろ行われますが、本会でも夏の集会は国際児童年に因んだテーマを選びました。(1ページ参照)小学生へのアンケートについては、各地の小学校の家庭科の先生九名にご協力いただき、六年生約六〇〇名の声を集めます。

質問する事項は、家庭科をどう思うかというもののほか、家事分担の実態と性別役割分担意識について。ご期待ください。

※ ご相談、ご意見をお寄せください

前号でもおしらせしましたように、共修に関することなら何でもご相談ください。世話人にお答えします。会員以外の方でも受け付けます。郵便で事務局あてにどうぞ。

この会報についてのご意見、運動のすすめ方についてのご意見もぜひお寄せください。

(編集部)